

読む人に夢や元気を 与える情報を発信したい



地域情報誌発行人

にし
西 みやび さん
Miyabi Nishi

20代、30代のOLやビ
ジネスマンをターゲット
に発行されている月刊情



鹿児島島の魅力を感じる電車が走る風景。

報誌「Leap(リップ)」。鹿児島島の地域情報誌として、芸能やファッションに関する話題から、おすすめのお店や観光スポットやおいしい食事ができるお店などの身近な情報まで、日常の暮らしに役立つさまざまな情報を読者に提供している。

その情報誌を自ら企画立案し、創刊後も編集長として常に取材や編集の中核を担ってきたのが西みやびさん。

先行していたタウン誌がモノクロをベースにしていた時代に、カラーをふんだんに使用した読みやすい紙面を提供することで、ピーク時には5万部を売り上げるヒット商品に成長させた。

今年からは、会社で発行する全ての出版物の責任者の立場である「発行人」として、その手腕をふるっている。

「昔よく先輩から、情報は足で稼げと言われてましたが、インターネットなどの普及で簡単に情報を得られるようになった今でもそこだけは変わりません。やはり直接行って、自分の目で見て記事にすることが大切です」と語る西みやびさんに、取材を通して感じたことなどを語ってもらった。

情報誌が流行をつくっていく

東京からUターンしたきつかけは

親との約束では大学の4年間だけという事で東京へ出たんですが、そのまま東京の新聞社に記者として就職してしまいました。そして、呼び戻される感じで28歳の時にUターンしました。親はそのまま結婚すると思っていたようですが、自分としてはそれでは後悔すると思いましたし、東京から帰る前にあいさつに行った大学時代の先生に「故郷でもう一花咲かせなさい」と背中を押されたこともあって、東京で得た経験を生かしてもう一度働こうと考えていました。

帰省してすぐに求人誌の募集を見て面接に行ったのですが、その日に電話があり、「履歴書を見た社長が会いたがっているからもう一度来て欲しい」とのことでした。社長との面接で「何か新しい出版物を出そうと考えている人材を求めているところなので、編集長として採用するからぜひ来て欲しい」と言われて今の会社に就職しました。

なぜ情報誌を

当時鹿児島にはタウン誌と呼ばれているものが2つあり、3誌目はなかなか成り立たなくて、創刊しては消えていくという運命を繰り返していました。ただ、既に発行されているものは薄くてモノクロがメインでした。東京では雑誌というとみんなカラーなのに、どうして地方にはそういう雑誌と呼べるものがないんだろうという思いを持っていました。そこで「地方から中央に向けて情報発信できるような雑誌を作りたい」と情報誌の企画書を社長に出したところ、面白そうだねということで発行が決まりました。

売れ行きは

初めの4カ月は思っていたほどは売れませんでした。そこで知名度を上げるために、豪華な読者プレゼントの抽選会を当時若者の人気スポットだったディスコで行って、その模様をテレビ局に取材してもらったり、カラーページを多く使用したためにやや高めに設定していた販売価格を他誌と同額にして、それと同時に生まれ変わるイメージのコマーシャルを流したりしました。それから爆発的に売れだして、発売して3日で売り切れることもありました。面白いと思ったのは、売れ始めてブラン

ドとして認知されると、「Leap」自身が流行を作って行くようになったことです。作り手は、今流行っているものを取材するのではなく、これから流行ると思うものを特集するので、勘みたいなものが必要となりますが、特集で取り上げたものが若者の間で流行していくのをみて、さすがに鳥肌が立つというか、ある意味恐ろしくもありました。

取材を通して見た鹿児島はどう?

鹿児島は町の中に温泉があつたり、電車が走る風景が残っていたり、そこに住む人から見える魅力はたくさんあると思います。ただ観光地として魅力的かと言われると、まだまだブランド力に物足りなさを感じます。

それと成功している他県の事例を見て思うのは、秘湯ブームに乗った黒川温泉にしても、昭和の町づくりで有名な豊後高田市にしても、そこに住む人たちが一体となつて積極的に動いたことが結果につながっているということです。鹿児島も来年の大河ドラマや4年後の新幹線全線開通など大きなイベントがありますが、それ頼るだけではなく、地域一体となった取組で他の観光地にはない独自の魅力をつくること、ブランド力を高めていくことが大切だと思います。



若手社員と意見を交換をする西さん。

読む人に何を伝えたい

最初の頃、表紙などには鹿児島の人を使わずに中央の芸能人や著名人を使うことにこだわっていました。それは決して鹿児島を馬鹿にしていたのではなく、地方誌でもここまでできるということを示したかったのです。そして地方に住んでいる人に、こんなこともできるといふ夢を与えたかったのです。

創刊したときから、鹿児島はとっても魅力的だと思ってもらえるような雑誌を作りたいたと考えていたし、読む人に夢や元気を与えるような魅力のある情報を発信していきたいという強い思いを持っていました。これからは、県外や外国の人々に鹿児島の素晴らしさを伝える情報誌にも、力を入れていきたいと考えています。